

グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」

第 19 回 コンフリクトの人文科学セミナー

大阪大学グローバルコラボレーションセンター

第 27 回 GLOCOL セミナー

開発のない世界？

A WORLD WITHOUT DEVELOPMENT?

アバディーン大学

ムスタファ・カマル・パシヤ

2008 年 7 月 29 日（木） 17:00 - 19:00 大阪大学大学院人間科学研究科（吹田キャンパス）IC ホール 4 階会議室

栗本英世（司会：大阪大学人間科学部教授）

このセミナーは「コンフリクトの人文科学」セミナーと GLOCOL セミナーを兼ねたものである。今回はムスタファ・カマル・パシヤ教授を迎えるという光栄な機会を得た。彼は今年 3 月に GLOCOL が開催した学術会議「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障」を企画したメンバーの一員でもある。パシヤ氏は、今回、神戸大学の国際協力研究科における客員教授として一ヶ月日本に滞在する機会を得られた。この機会にパシヤ氏をお迎えできたのは大変光栄なことである。本日の講演は「開発のない世界？」と題されている。これは挑戦的で議論を巻き起こしそうな題目であるため、この機会を得られたのは幸いである。

彼は、国際関係において高名な学者であり、最近では『911 後の世界において人間の安全を保障する—批判的、グローバル的考察—』(*Protecting Human Security in a Post 9/11 World: Critical and Global Insights*, 2007) という本を立命館大学の斎藤誠教授、ジョージ・シャーニー(Giorgio Shani)准教授と共編している。本日はパシヤ教授を紹介できたことを大変光栄に思う。

パシヤ

まず、栗本英世教授と小泉潤二教授に心からの感謝の意を示したい。小泉教授は学者として、また大阪大学の副学長として、大変忙しい中、この講演にお越しいただいた。彼は早い段階からこのセミナーに参加したいと仰ってくれた。本日の講演は人類学が関係するトピックでもあるので、彼の前で話すということに対して恐れ多さも感じている。また、峯陽一氏にも歓迎の意を示したい。彼とは二日前に再会したが、それは大変嬉しいことであった。さらに、ここにいるすべての GLOCOL、GCOE 関係者にも参加していただいたことに対する感謝を述べておきたい。

栗本教授が述べたように、今回の題目は挑戦的で議論を呼び起こすものである。それゆえ、最初にこのタイトルの意味と、このタイトルを選んだ理由を話しておきたい。現在、我々は来年の開発に関する学術会議の準備中である。その準備段階において私は「開発がない」状態というのは存在せず、その概念は実験的なものでしかありえないことに気付いた。我々が国際関係を論ずる時、また社会を比較する時、開発という概念はその作業の中に常に存在している。それゆえ、開発というのは取り組むには容易であるが、そこから脱却するのは困難な概念といえる。よって、この問題の持つ論点を掴み取ることは難しい。

この講演は三つに区切るよう構成した。第一に、開発という概念を歴史的、哲学的なコンテクストに位置づけるという作業をしたい。「この概念はどこから来たのか」、そして「この概念は知的世界(intellectual biography)との関連においてどのような意味を持つのか」について論じていきたい。ここでは、この概念の歴史、つまりこの概念がどのような歴史を経てきたのかを探ることによって、この概念の起源を辿って生きたい。第二に、この概念に対する批判を紹介する。ここではラテン・アメリカの学者によって提唱されたポスト開発の思想に大幅に時間を割いて、この作業を行いたい。また、人類学者も開発や国境を越えた文化という考えに対して挑戦してきていることについても言及したい。第三に、開発を考える上で、オルタナティブな視点がありえるのかということについて考えたい。この部分は実験的な考察であり、暫定的なものである。よって、ここでは私は謙虚に考えを示していきたい。

現在、開発という概念は我々と共に存在している。また、それは進歩という概念についても当てはまるであろう。しかし、開発という概念は比較的新しい概念である。この概念は社会を考える理論において特定の意味を持ち、ある意味では、モダニティの到来と関係している。モダニティという考えがなければ、開発は考えられないのである。この二つは同じではない。しかし、この二つは共に歴史を歩んでおり、この二つの概念の歴史は双子といてもよいであろう。

モダニティは開発のコンテクストを作り、開発の概念を自立したものにしていくが、モダニティという言葉との関連において開発を考える際に、欠かすことのできない要素が三つある。

その一つ目が啓蒙主義である。この流れは17～18世紀に始まり、18～19世紀において花開いた。アダム・スミス(Adam Smith)により記された啓蒙主義の最初の代表的な著作である『国富論』(*Wealth of Nations*)は、1776年に出版された。彼やその当時の啓蒙主義者は興味深い考えを提示したが、それらはさらなる大きな動きの一部に過ぎなかった。その動きとは物の見方が宗教的なものから、理性的なものへと転換したことである。前者は、宗教的なもの、精神的なもの、そして超自然的な力が宇宙の本質(the nature of cosmos)であるという考えであり、後者は人間の理性を信じるという考えである。

人間の理性は人間の思考を宗教とは関係ないものとし、俗化した。そして、それは人間の問題は人間による解決方法を持たなければならないという考えを生み出した。この考えは開発や進歩と関係したものである。この考えは「物事はよくなる」、つまり上昇傾向を持つという考え方に繋がった。だが、この考えはある意味において実にキリスト教的である。この考えは、キリスト教において欠かすことのできない「救い」という概念と関係しているのである。つまり、開発は「救い」が宗教的ではなくなり、俗化したものと考えることができるのである。それは「救い」が死後ではなく、現世で行われることを意味する。さらにこの変化は「救い」の志向を、財(wealth)の追及、つまり人生における物質的条件の改善へと方向転換させたのである。

人類学者は「財」という概念は新しいものではないと主張するかもしれない。しかし、財の「追求」という概念は新しい概念である。財という概念、つまり裕福さという考えは長い間我々と共にあった。しかし、「財の追求」という考えは新しいものであり、今やそれが我々の社会を構成している。現在の財の生産のために社会が構成されているという状態は比較的新しいものである。現在では社会全体が財の生産の為に構成されており、この考えが我々の生活において主流を占めている。

財の追求は我々の生活における唯一の主要な原理となっている。では、それにより、人間社会、文化、アイデンティティはどうなってしまったのであろうか。財をもつという行為は本質的には誤ったものではない。しかし、それが社会の構成原理となっており、すべてのエネルギーが財の生産という行為に注がれているという事態は、我々の生活、コミュニティ、家族、人間関係に対して重要な意味合いを帯びてくる。

我々は「財の追求」という観念によって、文明化が可能であるという考えを得ることができる。逆に言うと財なしには文明化は達成し得ないのである。この考え方に基づきアダム・スミスは野蛮な人々と文明化した人々の区別を明確に示した。彼の考え方では、文明化した人々は財を持っており、社会は財を中心に構成されている。社会が財の追求という原則

によって運営されているということは、社会が市場、分業体制、「神の見えざる手」によって運営されていることを意味する。

この財と財の追求に対する考え方は、数十年、数百年という時を経て、グローバルなものとなった。長い時を経て、この概念はそれに抵抗・挑戦する考え方に打ち勝ち、以前は異なる価値観が重要であると考えていた多くの文化や社会において主要原理という立場にのし上がっていったのである。

ここで私は「夢の世界」(Dreamworld)というユダヤ系ドイツ人の学者、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)が用いた言葉を使いたいと思う。この言葉は「世界を再び魅了すること(re-enchantment)に関連する集成的精神意識」と定義することができる。ここで重要なことは「再び魅了する」ということである。開発とは「世界を再び魅了することに関連する集成的精神意識」といえる。モダニティと関連する開発が世界を再び魅了するということはおかしく聞こえるかもしれない。モダニティは幻想を打ち砕く(disenchantment)ものと考えられてきたからである。マックス・ウェーバー(Max Weber)やその他の社会理論では、それをモダニティの一部の役割として述べている。また、モダニティの到来と共に、我々は神は存在していないということに気づかされた。それはニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche)の「神は死んだ。」という言葉に代表されるものであろう。しかし、開発は再び人間を魅了する。モダニティは一方で幻想を打ち砕き、その一方で、開発は再び我々を魅了するのである。

「夢の世界」という考えは開発という考えにとって不可欠な要素である。その理由のひとつは、「夢の世界」という考えがダムやビルといったメガ・プロジェクトを行うことを可能とした。それは「我々が世界を構築する」という考え方に繋がり、地形と環境に変化をもたらした。

この「再び魅了された世界」に対処するためにはメガ・プロジェクトについて考える必要がある。「夢の世界」は多くのメガ・プロジェクトを促してきた。その典型例は旧社会主義諸国に見られる。このような国では膨大な人間の力がメガ・プロジェクトにそそがれたが、それは結局、その社会の経済を崩壊せしめた。ソビエト連邦が提供した援助は、膨大な支出をした挙句、崩壊するようなものであった。このような開発の失敗を目撃したことは、70年代にシューマッハ(E. F. Schumacher)によって書かれた『スモール・イズ・ビューティフル』(*Small is Beautiful: Economics as if People Mattered*, 1999)を想起させる。

メガ・プロジェクトを見る一つの方法として、それをガンディによる村落コミュニティや小規模プロジェクトに対する理解と比較することが挙げられる。メガ・プロジェクトは大きな惨事をもたらす。プロジェクトは大きくなるほど、失敗の危険性も大きくなる。その一方で、小規模プロジェクトは失敗する可能性も低いといえる。

「夢の世界」が持つもう一つの特徴として社会設計(Social Engineering)が挙げられる。この考えは開発における集成的ではない精神意識を考えることを可能にする。この考えは社会を設計するために人間関係、社会、文化に介入することを意味する。この例としてモハメド・ユヌス氏の努力によりノーベル平和賞を受賞したマイクロ・ファイナンスの取り組みが挙げられるであろう。女性を企業人とするためには、どのように市場に対応するか、会計をどのように行うか、どのように多くの財を所有するかを教えなければならない。社会設計の概念は社会の仕組みや社会関係を変化させることを意図している。

メガ・プロジェクトや社会設計を行うために欠かすことのできないのは国家である。それゆえ、開発の概念においては国家が中心的なものとなる。しかし、この考えはアダム・スミスなどの古典的政治経済学者の考え方と反するものである。そのような学者が想定していたのは自己の利益を追求する個人のみである。しかし、1945年以来、特に脱植民地の波において新しい国家が多く登場した後、そのような国家は都市化や工業化といったメガ・プロジェクトや社会設計を行うようになった。それにより国家は開発に必要不可欠なものになったのである。このように、国家の存在理由は開発に依拠している。つまり、開発を提供することにどれだけ成功するかによって国家の存在理由が決定されるのである。人々がこの国

は成功しているか、失敗しているかを判断する際、それは多くの部分、その国が開発を成し遂げたか否かにかかっている。

ここで、国家が失敗する、つまり失敗国家という新しい言葉が登場した。この言葉は、統治も開発もできない国家のことを意味している。このような国は効果的な統治、法と秩序、安全、物質的開発を提供できないでいる。

世界の多くの部分で「夢の世界」は崩壊したが、東アジア、東南アジアでは、比較的開発に成功したといえる。そのような国として NICs (新興工業国)、ギャング・オブ・フォー (韓国、シンガポール、香港、台湾)、ギャング・オブ・フォー第二世代 (マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ) が挙げられる。ギャング・オブ・フォー第二世代は、アジア通貨危機を経験しており、その成功は脆弱なものであるが、それでも成功と考えることができるであろう。

ここで、開発という概念のもう一つの側面について説明したい。開発という概念は二つの矛盾した指向を同時に持っている。開発は比較無しでは考えることができないということである。A の開発、B の開発というように比較をしなければ開発を想起することができない。そして、その比較の対象は主権国家というかたちをとる。つまり、開発は空間的に一定な枠の中で行われる。すべての国が境界を持ち、その境界はおおよそ固定的である。このようなある程度固定した存在の中で開発というものが行われている。それゆえ、すべての国は開発することができるが、国境という枠の内側でしか行うことができない。つまり、グローバルな開発というのを考えることができないのである。それは開発に関する資料を見ると明らかであろう。そのような資料はすべて国家に関連したものである。開発の直線的な進歩はこのような境界の中でしか行われぬ。低開発から開発への進歩というのは国家の枠の中で論じられる話にしか過ぎないのである。

その一方で、開発は普遍性を持っている。これが比較という考えと矛盾するものであろう。この考えは現代化された思考において欠かすことのできない要素である。現代化された思考では、すべての社会が進歩、あるいは開発できなければならないとされる。社会は様々な障害を持つかもしれない。例えば、社会、環境、技術が開発を遅らせているかもしれない、しかし、すべての社会は開発できると現代化された思考においては考えられる。それゆえ、普遍性は重要な要素なのである。

次に本講演の第二部、開発という概念についての批判に移ろう。1960年代、開発や進歩は痛烈な批判を浴びることとなった。このような批判はラテン・アメリカから生じた。従属論といわれる学者たちが開発を批判しだした。例えば、フランク (Andre Gunder Frank) やカルドーズ (Fernando Henrique Cardoso) といった学者は、それぞれラテン・アメリカ内の異なる地域に対する研究を通して開発の概念に対して異議を唱えた。このような批判は、1969年にフランクにより発表された「開発と低開発」という考え方に要約できよう (Frank, 1975)。この考え方は「北」つまり先進諸国との関係を持つほど、開発の可能性が阻害される状態に置かれる、つまり、「低開発」状態になるという主張を行っている。このような批判には4つの考え方に対する批判が存在している。

第一は「単線的発展」という、すべての国が、同じ三つ、ないしは四つの段階を経て発展するという考え方である。この考え方は、「南」からの批判だけではなく、内部からの非難にも曝されてきた。例えば、アレクサンダー・ガーシェンクロン (Alexander Gerschenkron) による著書『歴史的視座から見る経済的後進性』 (*Economic Backwardness in Historical Perspective*, 1940) は、そのような非難の一つといえよう。そのような批判を経て、単線的発展論は棄却されることになる。

第二は、ヨーロッパ中心主義である。この考え方は、開発という概念の究極的な形は西洋化であるという考え方である。開発の概念をヨーロッパ中心主義的なものにならしめている要素はいくつか存在する。ひとつめに、開発のためには市場を前提とした社会秩序の形成が必要だという考え方がある。また、ふたつめには、自己利益の追求を行う個人が必要だという考え方があげられる。これはアダム・スミスとの親和性が見受けられる。

第三は、法の支配、民主的構造、リベラルな社会といった特定の枠組みが開発のために必要であるという考え方があげられる。しかし、ハンチントン (Samuel P. Huntington) のような近代化論者はこの考えを否定している。彼らは、例えば、民主主義は開発には不可欠であるといった考え方に疑問を呈している。事実、ほとんどの開発を達成しえた国家では権威

主義的な統治が行われた。また、東アジアの経験の経験は、開発のためには市場のみが必要であるという近代化論の持つ考えを否定するものであった。例えば、シンガポールでは強い権威主義体制がひかれた。また、中国では、経済改革にも関わらず、国家は開発に対して重要な役割を持っている。中国はどう考えても民主的な国とはいえない。そのような国では市場ではなく、国家が開発において中心的役割を果たした。このような例が示すように、ヨーロッパ中心主義モデルが開発の前提として想定した要素は、現実では必要なかったのである。

従属論のほかにも、研究者は文化的側面からも開発を批判してきた。彼らによると、開発は土地やコミュニティといったものと人間との関係の転位や剥奪をもたらすという。彼らは開発を解放のプロセスとはみなさず、転位のプロセスとみなした。さらにそれだけではなく、彼らは開発を、デュルケム(Émile Durkheim)のアノミー(anomy)の概念の再来であるとまで主張している。この概念は、人間がアイデンティティの喪失をすることによって疎外感を感じ、それが不安定をもたらすという考え方である。このように、彼らは開発を分裂のプロセスであると認識した。

このような批判は、アンチ・グローバル化論者との親和性を持つ。彼らは、ヨーロッパ中心主義的かつ単線的に、すべての社会はひとつの社会に統合されるというネオ・リベラルなグローバル化の考え方に対して批判を呈している。現在のグローバル化と過去の開発に対する批判が親和性を有するということから、同じ考え方が現在において再来することが見受けられることが分かる。過去に登場した開発の概念と現在我々が直面するグローバル化は、同じような批判に直面している。今日の、反 WTO、反 G8、社会フォーラムといった反グローバル化の言説は、1970 年代から 1980 年代の考え方の再来といえよう。

しかし、そのような、開発に対する批判は、「開発の概念に対して挑戦する担い手は誰なのか」という問題に直面した。この批判は、様々な視点から多くの学者によって提唱された。その中には、コロンビアのアルトゥーロ・エスコバル(Arturo Escobar)などが含まれる。このようなポスト開発の批判では開発を、突き詰めてみると、現在の主流を形成しているイデオロギーであるとみなす。彼らは開発を、ヨーロッパ中心主義などのバイアスを織り込み、権力の追求、構築、獲得との関係を持つ存在であると位置付ける。このような批判はミシェル・フーコー(Michael Foucault)の知識と権力の関係に影響を受けているといえよう、

開発とは作られた概念であるため、同様に貧困も作られた概念である。人間は資源を持っていないという状態に長い間置かれていたかもしれない。しかし、貧困という概念が登場したのは近年の現象であり、「北」が権力を行使するために作られた概念であるとも考えることができる。この言説では、すべての開発計画は、根本的に「南北」の権力関係を表しているが、それが貧困という概念によって隠されていると考える。

1980 年代から 1990 年代にかけてこのような批判が登場し、いまや開発は新しい形を想定するに至っている。その結果、今日における開発という概念は、ネオ・リベラリズムの概念ほど由々しきものであるとは考えられなくなってきた。その結果、このような批判はその矛先をネオ・リベラリズムに向けている。かつて我々は開発を批判したが、今やその批判は開発ではなく、ネオ・リベラリズムに向けられているのである。

ネオ・リベラリズムは四つの要素を持っている。一つ目は、福祉国家の後退である。ネオ・リベラリズムでは、国家は非効率であり、国家中心の開発は理想とは考えられていない。二つ目は、インフォーマル化である。ネオ・リベラルな世界観では、多くのものがインフォーマルであることが理想とされる。その例として、労働が好例であろう。現在生み出されているほとんどの雇用のほとんどが非常勤であり、日雇いであり、契約である。この傾向は、現在の世界においてグローバルに見られる現象であり、それは労働者による長期的な安全や安心を得ることの妨げとなっている。このような見方の一つとして、アフリカでの経験を持つマーク・ダフィールド(Mark Duffield)があげられる。彼は、保障されている人々、保障されていない人々の間の明確な区別をした。彼によると、世界はその二つの区分に二分されているという。

三つ目は自助である。インフォーマル化は自助の概念と結びついている。ある意味で、ネオ・リベラリズムが持つ原則

は単純であり、「成功する機会は与えよう、だが、その失敗は自己責任である」というものである。今日、ガバメンタリティ(governmentality)は、自助の考え方に重きを置くようになってきている。つまり、自己規制を想定しているのである。これは今日の第三世界において、多くの社会サービスが NGO や市民社会によって行われているということからも明らかであろう。この傾向は、国家の撤退を意味し、マイク・デイビス(Mike Davis)が、著書『スラムの惑星』(Planet of Slums, 2006)において提唱した「スラムの惑星」という概念が提唱した状況を作り出している。この著作は、この 10 年間で最も重要な著作であるといえよう。

四つ目は、民営化である。民営化は軍事を含むすべての分野においている。今や、イラクに存在する軍隊のうち 50% が民営である。このような民営部隊は、民営であるが、国家に属するものであると考えられている。

そのようなネオ・リベラリズムと同時並行的に展開しているのがグローバル化である。グローバル化は、ひとつの分類方法として、「上からのグローバル化」と「下からのグローバル化」に分けることができる。これはアメリカの国際政治学者、リチャード・フォーク(Richard Falk)によって提唱されたものである。前者は均一化のプロセス、特に西洋中心の均一化のプロセスであり、マクドナルド化、WTO、G-8、スターバックスが好例であろう。この上から下へのグローバル化は、少数の人々がグローバルな文化を形成していくプロセスである。「上からのグローバル化」において、グローバル化は西洋化と同意義を持つ。

一方、グローバル化は別の方向性をも持っている。それが、「下からのグローバル化」である。これらには社会運動、抵抗やその他グローバル化の均質化の考え方に対して挑戦する物事が含まれる。それらには社会的貧困、社会フォーラム、反グローバル化の抵抗といったものが含まれる。

この二つのプロセスが同時並行的に生じているということは、均質化と分裂が同時並行的に生じていることを意味する。分裂はコミュニティで生じているだけではなく、国家でも生じている。この 20 年を振り返ってみてみると、ソ連、旧ユーゴスラビア、チェコスロバキアの事例が示すように国家は分裂し、新しい国家の誕生を導いている。この傾向はグローバル化と関連している。

開発という概念は多くの批判にさらされながらも現在でも広く肯定されている。では、なぜ開発は現在も一定の立場を維持しているのだろうか。その理由として、私が考えるに、開発という概念が我々人類に対して与えた目標が、現在では未来を作るための手段になっているからだと考える。つまり、現在は未来によって規定されているのである。この力学はとても強いものである。我々は労働しているが、そのひとつの理由として、義務や社会的責任ということがあげられよう。しかしそれだけではなく、労働することによってよりよい未来が待っているという考えが我々を突き動かしているということもまた事実である。その意味で、未来は過去に規定されるのではなく、現在は未来によって規定されているのである。

では、開発という概念が適切なものではないとするならば、どのように我々は、人間が直面する状況に立ち向かえばよいのであろうか。開発という概念のオルタナティブは存在するのであろうか。現在、人間の安全保障という新たな概念が誕生し、流布しつつある。しかしこの考えは、開発という概念が含むひとつの概念の抽出にすぎない。この概念は開発との類似性を持っている。

その事実が、本講演の第三部への導入となる。開発という概念は、どのように再提唱すればよいのであろうか。これまでの内容を振り返ってみると、まず開発という概念が含む三つの概念を紹介した、次に、開発は「メガ・プロジェクト」と「社会設計」という二つの側面から理解できることを示した。しかし、開発という概念が包摂している考え方の一部は批判にさらされ、消えてしまった。このように開発の概念は歴史的なプロセスを持っている。人間は物質的・環境的な制約に制限されており、それを打ち破るための概念として開発が存在している。そこでは人間は制約に打ち勝たなければならないとされている。例えば、貧困国において津波が数千もの貧困層に属する人々の生命を奪ったとしよう。しかしそのような状況がある一方、津波に対処する能力を持っているため、アメリカでは年に 6-8 回の津波を経験しているのに死亡

者は存在しない。そう考えると、開発とは制約に対処する能力を構築することであると理解することもできる。

開発という概念を再提唱するための一つの方法として、その概念を解体するという方法があるだろう。そうすると、開発は四つの側面に分けることができる。それらの概念はそれぞれが相反する概念であり、それが開発を考える上での重要性を示唆している。第一は、「物質的満足(material well-being)」である。この考えでは、人間が餓えたり、食糧が不足したりしているという状態はあってはならないと考える。つまり、基本的なニーズ(basic needs)という考え方である。そしてそれは、基本的という意味は文化によって異なるのにも関わらず、普遍的な意味を帯びている。しかし、すべての人間が物質的な満足を享受しているわけではない。よって、物質的満足に相反する概念として「貧困(destitution)」という概念が存在する。第二は、「安全(security)」と「安全の不在(insecurity)」である。安全がなければ開発について考えることができない。安全は、個人の安全という側面の他に、集団にとっての安全(collective security or security for a unit)という側面をも持つ。第三は、「自由(freedom)」と「囚われ(slave and slavery)」である。自由の概念は民主主義や正義(justice)との関わりから語られることが多い。自由という概念は公正性(just)の概念をも含んだものである。とはいっても、それは、民主主義やリベラリズムを保持しなければならないということの意味するものではなく、人々が頼りにすることができるような公正な社会(just society)を持たなければならないことを意味する。第四はアイデンティティであり、それに反する概念としての阻害である。開発の概念に対抗していくためには、我々はこのようなひとつひとつ側面に限定されていない、新しい開発の概念を考える必要がある。

質疑応答

峯陽一（大阪大学 GLOCOL 副センター長）

お話ありがとうございます。私はあなたの開発をプロセスとして捉える考えに刺激されたが、開発という概念に対する系譜に関して二つのコメントがある。第一に、私は、本日の講演のタイトルを聞いて、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)が提唱した「定常状態(stationary state)」の概念を想起した。経済学者の議論や理論を考慮なしには開発を語ることはできない。経済学の議論は、アダム・スミスに始まり、デヴィッド・リカード(David Ricard)、ジョン・スチュアート・ミル、カール・マルクス(Carl Marx)、限界革命を経て、ジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes)に至る。

ジョン・スチュアート・ミルは、リベラリズムの祖と位置づけられているが、彼は同時に社会主義者でもあり、フェビアン社会主義に影響を与えている。彼は「定常状態」という概念において、すべての経済において発展は止まる、つまり成長率がゼロになると主張した。彼によると、自然条件や農業セクターが制約となり、経済は永遠に発展することはできないという。彼は、この考えを肯定的な意味で用いている。彼は、定常状態では、人々が文化やアイデンティティ、価値といったものにおいて豊かさを追求することができると主張している。

一方、伝統的経済学の中では最も急進的な考え方とされるマルキシズムは彼のように考えない。彼らにとって、開発とは近代化論である。彼によると、資本主義経済では、生産力は生産関係により制限されるという。その一方、社会主義経済では人々は生産力を発揮することができ、それが共産主義経済で花開くという。このように、彼らは開発を単線的なプロセスとして捉えた上で、物質、つまり生産が生み出した報酬について異常なほどの執着を見せている。その意味では、古典的マルクス主義は近代化論者であると位置づけてよいであろう。

ミルが提唱した分析枠組みは多くの意味で問題をはらんだものであるが、私見として、経済学者は、定常状態のような概念を発展させていかなければならないと思う。

第二に、社会開発の概念について質問したい。例えば、19 世紀後半の英英辞典では、「開発」とは搾取ではない資源の使用を意味する言葉として記載されている。社会開発と経済開発の概念は 1940 年にイギリス議会が「植民地開発福祉法

(the Colonial Development and Welfare Act)』を通過させたときに生まれたとあってよい。この法案は、マイケル・マクドナルド(Michael McDonald)により起草されたものであるが、そこで初めて「開発」という概念が初めて我々が今日「社会開発」と呼ぶような事柄と統合して考えられるようになったのである。それが、「経済開発」と「社会開発」の区分の淵源といえよう。

とはいっても、この概念は政治性を孕んだものであった。その当時、イギリスはナチス・ドイツなどから植民地保有に対して非難を受けていた。米国でさえも非難をしていた。それゆえ、イギリス政府は福祉の対象を植民地臣民にも拡大した。今日、社会開発は、良性であり、貪欲な経済開発とは異なるというイメージをもたれている。それは確かに当てはまるであろうが、社会開発という概念の誕生は政治的な制約に満ちたものであった。

パシヤ 第一のコメントに関して述べると、開発という概念の系譜は様々な形で考えられるだろう。開発の概念が包摂するいくつかの概念は、我々が長い間抱いてきた考えであり、最初に介入の方法を考えしたのはスミスである。その概念は財の追求(wealth-seeking)であり、人間の進歩と結びついた考え方である。

私は、開発という言葉そのものが、概念的にどのような変遷を経てきたのか、そしてそれに対して世界はどのように考えていたのかということ強調したいのであり、経済開発についてではない。確かに、開発の概念はミルのような英国の政治経済学者により発展してきたかもしれない。しかし、その系譜は経済学者にとっての系譜といえるだろう。私は政治経済学者の視点からの系譜を見たのであり、それが理解の相違を生んだのかもしれない。

我々が今日理解している開発の概念は、NGO、国際機関、多国籍機関(multi-lateral institution)など開発業界に深く浸透しているが、それは先ほどおっしゃった第二次世界大戦までの開発に対する理解とは異なるものである。今日の開発に対する理解はそのあとに生まれたものである。今日の開発の概念は再植民地化や旧植民地との関係性の中で生まれてきたものである。それは、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカといった台頭しつつある国との新しい関係性を構築するための枠組みとして登場したとあってよいであろう。

第二のコメントに関して述べると、人間開発・社会開発・持続可能な開発・人間の顔をした開発といった派生語は開発という概念が持つ否定的な側面を和らげる役割を負っていると考えてよいであろう。そのような語は、本質的には開発が持つ枠組みと本質的に同じであると考えるべき。

常田夕美子 (大阪大学 GLOCOL 特任助教)

一つ目に確認したいことが一点ある。講演の中で開発に代わってネオ・リベラリズムが批判の対象となったという発言があったが、それについて詳しく述べてほしい。どのような変遷をたどってきたのか、そしてどのように、なぜそれが起こったのかを述べてほしい。二つ目に、現在ではスミスの時代の世界観は失われ、新しい概念がとってかわったとのべたが、今度新しい変遷が起こると考えるか。

パシヤ 二つ目に関しての応答から始めさせてもらいたい。本講演のタイトル「開発なき世界」は、二つの意味で理解することができる。第一に、峯氏が指摘したような進歩がない状態である。私はこれについて論じているわけではないが、これについては多くの議論が存在する。

むしろ私は概念的に、もし開発という概念がなければどのように我々は世界を体系化できるのか、どのように我々は国を見ることができるのか、どのように我々は国を比較するのか、どのようにアフリカを見るのか、というようなことを提起することを意図し議論を展開した。これは取り組みにくい課題ではある。ここにいる多くの者は研究に従事している者であろう。考えてもらいたい。あなたは開発が用いる言葉を使わないでアフリカについて述べることができるだろうか。

我々がそのような国について考えるとき、気付かないうちに彼らを比較の対象としており、比較こそが開発にとって欠かすことのできない要素なのである。開発の概念は、ある意味での普遍性を前提としており、かつ、差異の存在をも前提としている。開発は、人間は普遍的に同じであるという前提に立っているが、現在ではさまざまな社会は、それぞれ別々の段階に位置しているのだと考えている。しかし長期的な視点に立つてみると、人類が経験してきた挑戦を比較なしに見ることができるのである。人類は制度を構築し、さまざまな難関に立ち向かうためのメカニズムを構築してきた。もし開発という概念がなければ、それらの取り組みを比較せずに見ることができるであろう。しかし現在、我々はそれに優劣をつけている。では、それがどのように可能となるのか？それをするためには開発なき世界を考える必要があるのではないだろうか。これが第二の意味である。

どのように社会を分類し、優劣に還元することを避けられるのか。このことについて、私は政治学者、経済学者、人類学者に対して促していきたい。私見では、人類学者はこの点に関して、有用な視点を持っている。彼らはさまざまな社会を、人間の共通性と差異を求める視点から観察している。

栗本英世

私はパシヤ氏の立ち位置がまだわからない。あなたは、我々はそれでも開発という概念を使わなければならないと考えているのか、それともそうではないのか。また、なぜ開発という言葉の本講演で使ったのか、他の言葉でもよかったのではないか。スライドの最後に開発の4つの側面を提示してくれたが、これは人間の安全保障や人間の尊厳といった他の概念も含むものではないのか。

パシヤ 難しい質問であるが、できるだけ答えようと思う。私が本講演で意図していたのは、問題提起であり、答えを出すことではない。この4つの側面は人間の持つ条件についてのものである。開発以外の概念では、すべての側面にこたえることはできないであろう。ひとつの側面に即して比較をするということは、ひとつの考え方にとらわれるということである。それは、ヨーロッパ中心主義や経済成長、工業化といったものであろう。この四つの側面は、人類学的、民族学的な側面を比較に与えるものである。

開発を長期的にみた場合、それは人間が物質的な制約に対応し、打ち勝っていくプロセスとして理解できる。しかし、そのプロセスの中で、開発は解決策を与える一方、その後の問題をも作ることになる。我々は、過去の失敗に対しては非常に遅いペースでしか対応することができない。そのため同じ概念が何度も使用されているのである。

人間の尊厳といった概念は開発のオルタナティブにはなりえない。それは開発におけるひとつの側面にしか対応できないからである。この概念は、他者との遭遇を貧困のデータとして捉えるということに対して警鐘を促すかもしれないが、物質的開発を捉えるとはできない。確かに、人間の尊厳は大事な側面のひとつではある。経済学者は、他者との出会いを貧困のデータとして捉えることにより、世界を開発というゲームに巻き込んでいった。そこでは他者はデータとしてしか扱われない。それゆえ、人間の重要性は大きな意味を持つ。しかし、開発の持つ四つの側面すべてを捉えることはできない。

この応答は答えにはなっていないかもしれない。だが、開発を考える必要性が提唱しているものではあるだろう。

工藤晶人(大阪大学人間科学研究科グローバル COE 特任研究員)

開発に代わるオルタナティブな概念の提唱について質問したい。最後のスライドは 1990 年代初期のある社会学者による本を想起させた。彼によると経済開発は物質的に制約されているという。彼によると現在は、財の生産は物質的な世界から情報の世界へとシフトしているという。最後のスライドでは、物質主義と開発に対する新しい理解とアイデンティテ

イや自由、自己認識といった認知的側面が強調されているが、物質主義と認知的側面の関係をどのように考えるのか。

パンシャ この質問は、私が、人間の尊厳に関して栗本教授に対して行った応答とも関係するものである。もし、さまざまな文化が自立性を持つのであれば（外部からの影響を受けないのではなくて、自己の生活の形体を自ら構築できるという意味において）、様々な社会が様々な方法で社会を構築するであろう。しかし、彼らは同じではないが、似たような形で物質的な制約に直面するであろう。しかし、たとえ「よい生活」を作るための図式をかけたとしても、それらを比較する一つの図式を構築するのは不可能である。

ラテン・アメリカにおいて、作られてしまったそのような図式を打ち破ろうとする動きがみられる。例えば、ベネズエラやペルー、ブラジルではネオ・リベラリズムの概念と戦う動きが存在する。彼らは新しい形の社会の在り方を形成している。このような動きは今後 20 年の間に世界各国でみられるようになって考えている。グラムシがいうように、人々は潜在的に解決の糸口がなければ、問題を提起することはできないのだ。我々が面する問題はそのような湧き出る解決方法をどのように生かすかである。

私はひとつの図式を持って開発を理解することには反対である、しかし、それらはいくつかの側面として捉えることはできるであろう。私は情報が開発のカギとなると考えている。デジタル・デバイドにという言葉に代表されるように、我々は「持つ者」と「持たざる者」の新しい形に直面しているのである。

情報や知識は、開発のための資源となりうる。シンガポールでは情報を利用することによって経済発展を達成した。しかし、それはスーダンやバングラディシュといった食糧や衛生というような物質的側面が欠落しているような国では成り立たないであろう。

栗本英世

質疑応答を聞いていて、もう一つ質問したいことができた。ネオ・リベラリズムに反対する国々について言及する部分があったが、誰が開発の四つの側面を提供できると考えるのか。誰が人々の福祉や安全な生活、自由、そして疎外のない生活を保障し、実現するのか。

また、歴史を見てみると、当初、国家は近代化や開発の担い手ではなかった、しかし、彼らは参入してきたのである。ネオ・リベラリズムの議論は、福祉国家の撤退を論じているが、国家の撤退ではない。ネオ・リベラリズムにとっては強力な国家が必要なのである。よって、私は、開発の四つの側面をもたらすためには、国家が重要な役割を担うべきだと考えている。しかし、国家は唯一のアクターなのか。それとも、他のアクターが存在しているのか。あなたの考えを伺いたい。

パンシャ ひとつの国をモデルとみなすのは妥当ではないであろう。国々はそれぞれ異なる経験を持っているものである。しかし、どのような国家でもある程度はこの四つの側面に対応しなければならないだろう。これは、社会契約に近いものがある。しかし、その対応は国により異なっている。例えば、東アジアでは、自由を軽視し、開発や安全、法や秩序を強調した。旧ソ連や東ヨーロッパの国では物質的開発、法や自由、安全を重要視したが、阻害された者は多かった。

栗本氏がおっしゃったように、ネオ・リベラルな国家は以前の国家よりも強力な力を持つであろう。彼らは以前の国家のような制約を持っていない。彼らは少数の金融に従事するグローバル化したエリートに対してのみしかアカウンタビリティを持っていない。これらの国では労働のインフォーマル化のように自由の度合いが少なくなりつつある。

答えの一部は社会契約をどのように再考察するかにかかっていると思われる。我々は社会契約を個人の状況を考慮に入れた上で考えなければならない。つまり、ひとつのモデルではないということだ。しかし、それぞれの社会は、ネオ・リ

ベラルなグローバル化、国内における一定の歴史ブロックの固定化など様々な難問に直面している。

それらの難問に立ち向かうためには、社会契約を再考察することが必要である。社会契約は、人間の尊厳とは切っても切り離せない関係にある。しかし、近年、社会契約はグローバリゼーションといった困難な状況において論じられなければならない。私はラテン・アメリカのケースが解決策であるとは思わない。しかし、それらがオルタナティブであるとは思っている。

この 20 年間、我々は貧困に対して大きな注意を払うようになったが、平等に対しては注意を払わなくなっていった。例えば、ミレニアム開発目標(the Millennium Development Goals)では、貧困しか論じられていない。この変化は我々にとって非常に重要な意味を持つ。我々は国内的にもグローバルにも平等について論じることはやめてしまったのである。我々は、平等の概念を研究の場に再び登場させる必要があり、どのように平等を達成させるか、そして、どのように社会契約が構築されるかを論じなければならない。

私は結論として、貧困よりも平等について論じなければならないことを強調したい。

峯

あなたは指標や数値化、ミレニアム開発目標について言及した。確かに、平均余命や一人当たりの GDP など開発に関する数値は多く存在している。これらは数値化できる開発である。だが、数値化については恐れるべき部分もある。もしかすると、文化や、社会的規範、音楽や文学まで数値化されるかもしれない。

そういったことは不可能であろうが、政治発展(political development)という概念は計測することに疑問を持たれつつも、根強く信じられている概念である。そこでは、独裁から民主化を経て自由民主主義へと至る流れが発展であると規定されている。私はこの概念に対して否定的だが、政治発展についてどのように考えるか。

パシヤ その考え方は暗に西洋の理想モデルを含んだものである。そこでは理想的な方向へ動いた場合のみ、進歩として考えられているのだ。だが、この概念は再加工することができるのではないだろうか。社会を統治するためには、社会的結束、きちんと機能する政治機構、アカウンタビリティのいくつかの要素が必要である。そして、国家がなければ我々は物質的な開発も社会秩序もないということも確かである。私は、政治学者が国家の概念を軽視している傾向を悲劇だと思っている。彼らは単に国家という概念を悪いもの、いけないものだとみなしている。私はその概念を批判する代わりに、その概念を再加工をすることを提示したい。

それゆえ、もしリベラルな国家をモデルとしないのであれば、政治発展という考えは有意義なものになりうるのではないかと考える。そのためには、我々は、その概念を解体し、社会を機能させるためにはどのような要素が必要なのかを考慮する必要がある。我々は社会を統治し、法と秩序を提供するために国家を必要とする。

開発の概念には、西洋が作り上げた理想的な経路と最終的な目標が深く埋め込まれている。それらは西洋の経験から得られた理想形として位置づけられているのである。

栗本

そろそろセッション閉会の時間がきました。もう一度、講演をいただいたパシヤ教授に感謝の意を表したいと思います。

参考文献

Davis, Mike. (2006) *Planet of Slums*. Verso Books.

Frank, Andre G.. (1975) *Latin America: Underdevelopment or revolution*. N.Y. Monthly Review Press.

Gerschenkron, Alexander. (1940) *Economic Backwardness in Historical Perspective*. Belknap Press.

Mill, J. S. (1848) *The Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, London: Longmans, Green and Co., ed. William J. Ashley, 1909. (Seventh edition).

Smith, Adam. (1776) *The Wealth of Nations*.

Schumacher, E. F. (1999) *Small is Beautiful: Economics as if People Mattered*. Hartley & Marks. (邦訳：シューマッハ、E. F. 著、小島慶三・酒井懋 訳 (1986) 『スモール イズ ビューティフルー人間中心の経済学』 講談社。) ベンヤミン、ヴァルター 著、今村仁司他 訳 (2003) 『パサージュ論』 (1～5 巻) 東京：岩波書店。